

九州朝日放送番組審議会議事概要（6月分）

第604回	九州朝日放送番組審議会 議事概要
開催年月日	平成30年6月19日(火) 午後3時30分～4時55分
開催場所	九州朝日放送 本社役員会議室
出席者	委員総数 8名 出席委員数 8名
	<p>(出席委員)</p> <p>古宮 洋二 委員長 野田 幸之輔 副委員長 守田 有理子 委員 鶴 利絵 委員 池田 勝 委員 井手 雅春 委員 安恒 万記 委員 戸田 康一郎 委員</p>
	<p>(放送事業者側出席者名)</p> <p>代表取締役社長 和氣 靖 取締役 笹栗 哲朗 取締役総編成局長 森 君夫 報道局長 白井 賢一郎 ラジオ局長 穴井 建一 報道局報道部長 柴田 高宏 テレビ営業局営業部 プロデューサー 永山 弘二(元報道部) テレビ営業局業務部 ディレクター 大賀 真由子(元報道部)</p>
	<p>番組審議会事務局局長兼視聴者・広報室長 井上 千秋 番組審議会事務局員(視聴者・広報室) 松永 俊郎</p>
議 題	<p>議 題 テレビ番組「まさか、私が～九州豪雨が遭したもの～」 放送日時：5月25日(金) 午前10：40～11：35</p> <p>報告事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 平成30年6月・7月 ラジオ・テレビ番組編成状況 平成30年5月 視聴者・聴取者応答状況 次回 平成30年7月度(第605回) 審議会日程 7月17日(火)午後3時30分～開催 <課 題> ラジオ番組「PAO～Nプレゼンツ ねえ！ひふみん グレイテストヒッツV o l . 1」 放送日時：5月26日(土) 昼0時30分～1時00分 その他
議事の概要	<p>○委員の意見(概要)</p> <p>委員からは、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○1時間の長尺番組は、被災地の「いま」と発災当時の状況、防災の教訓まで多岐にわたる項目やデータが盛り込まれた力作であり、このような番組を地元の民間放送局が制作・放送することは非常に有意義なことだと思った。防災報道等に力を入れるKBCらしい番組だと思った。 ○現時点だからこそ判明した事実も踏まえた十分な検証がなされており、今後の防災対策として一般視聴者にも考えていただくことができる内容だった。特に時系列で起きた出来事を地域ごとに説明していたことや、多くの被災者の生の声をともに制作されていた点は、その時実際に何が起きていたのかを知る上で有効だった。 ○住民の避難経路や集落ごとの避難状況、緊急車両の出動状況などが正確なエピソードに基づき地図上にプロットされていた点が良かった。線状降水帯や谷底平野などはグラフや図を用いて視覚を上手に活用して説明されており分かりやすかった。 ○「谷底平野」という地形の名称は聞いたことがなく、自分が住んでいる地域の地形さえ十分に理解していないことに愕然とした。地域に古くから伝わる地形にまつわる注意事項を未来に伝えていくことの重要性を再認識した。 ○過去の豪雨被害を教訓に独自のルールを定め、更に避難所として想定していた公民館への経路が濁流で絶たれると、すぐに別の高台へ住民を避難させることにより、一人の死者も出さずに済んだ平塚集落の事例は非常に印象深かった。こうしたエピソードは行政の広報や指示だけに頼らない自分たちが住む地域の条件に合致したまさにオーダーメイドの防災対策であり、そうした防災対策の必要性を実感した。 ○「まさか、私が」という番組名は、一般視聴者がいつ被災する側になるのか分からないのだから、自分は災害の当事者にはならないだろうという思い込みをなくし、目の前の状況を正しく把握して行動すべきということを強調する上で有効な題名だった。被災直後の去年8月に放送された特別番組「あの時私は」に呼応する秀逸なタイトルだった。 <p>などの評価を頂きました。</p> <p>また、気になる点や望むこととして、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○朝倉市が自ら策定した防災マニュアル通りにすら動いていなかったことには驚いた。マニュアルを策定しているも緊急時にそれに従い行動していなければどう備えようとも無駄になるという点で、行政には今後の運用を見直してほしいと思った。 ○朝倉市の防災マニュアルが守られていなかった点は大いに反省すべきだが、市の関心がダムの下流にいつしまったことや市内各地を監視できる設備がなかったことも被害を最小限に止めることができなかった原因ではないか。同様の事象が他の市町村で発生しても同規模の被害が発生していたのではないかと懸念し、研究者が指摘していたようにもはや行政の対応にも限界があると感じた。 ○同様の被害を招かないために今後どう取り組むべきかとの問いに、ある自治体の長が避難勧告を出しすぎると行政の信頼の低下を招きかねないとの回答があったが、人の命を助けるという意味合いにおいて責任逃れではないかと思した。自治体しか知らない情報も多々あり、まずそれらを公開すべきではないかと思した。 ○番組は基本的に時系列で被災当日の様子を振り返る内容だったが、被害が大きく多くの場所が被災したため、時間と場所が交錯し、多少分かりにくいと感じる部分もあった。 ○過去の災害の経験や災害履歴は生かすしかない。「プラスになることもマイナスになることもある」との専門家の意見は、その通りかもしれないが、批評家的に指摘した印象を受けた点は残念に感じた。 ○過去の豪雨被害を教訓に、避難訓練を実施し地域で独自のルールを作ることでよりコミュニティで災害に対する意識を高め犠牲者を出さずに済んだ地域の取り組みが紹介されていたが、そうした取り組みにはリーダーの存在が欠かせない。他方、福岡市のようにコミュニティが希薄な大都市で同様に対応できるのか不安を覚えた。 ○東峰村では高齢者が多く二次被害を懸念して首長が散逸して避難指示を出さなかったことが紹介されたが、もし避難をさせなかったことにより被害が拡大していたら、行政への非難の声は多く出していたのではないかと懸念した。住民の自助努力に任せただけのような首長の判断をどう評価すべきか戸惑うし、「お年寄りには避難をしない方がいい」という誤った解釈を招かないかと心配した。 ○日ごろの防災意識と災害への備えの大切さを教えてくれた一方で、自主的な判断に基づく行動の妨げが強調されすぎると何もかもが個人の責任にされかねない危険性もあるようにも感じた。 ○被災者の8割は自宅に留まり被災したというデータは大変なインパクトを受けた。まさに避難のタイミングを逃してしまう危険性を明確に警告するデータだったと思う。それだけにもう少しデータを詳細に分析し、そこから得られる教訓や対策を導き出すような番組構成にして欲しかった。番組のメッセージ性が更に高まったのではないかと感じた。 <p>などの評価を頂きました。</p> <p>これらに対して、担当者から、</p> <ul style="list-style-type: none"> ○被災者の皆さんの置かれた状況を視聴者に理解いただき、被災地に対して継続的な関心を持って頂くことをテーマの1つと考えたとともに、もう1つのテーマとして未曾有の災害から我々が教訓にするべきことは何か視聴者に当事者意識を持っていただきたいの思いで制作にあたった。 ○災害対策基本法に基づき福岡県や福岡市、北九州市とKBCは既に協定を締結しているが、それ以外の市町村については県を通じて避難情報等を得ておりタイムラグが生じていた。現在、KBCでは新たに福岡市町村とパートナーシップ協定を結び自治体から直接情報を届けてもらう取り組みを進めている。 ○今回の豪雨の取材で系列としても安全管理が大きなテーマとなった。取材時の安全の手引きを改めて様々な災害を想定して整備し、系列として体系化された新たなマニュアルを定めた。また、マニュアルの整備とあわせて定期的に災害取材の勉強会を社内で開催している。 ○今回の番組では仮設住宅でのアンケートを実施したが、被災者の気持ちになって取材に挑むよう心掛けた。被災地に足を運ぶ中で、取材は人と人の関係性や温もりがあって成り立つものであると再確認した。 ○被災者から話を聞く中で、話を聞いてくれることが嬉しいとおっしゃる方が非常に多くいた。被害が大きいところを集中的に放送しがちだが、被害の大小に関わらず色々な地区に寄り添うことが多く大事だと考えさせられた。 <p>などの説明をしました。</p>